
不思議の星のアリス

飯田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の星のアリス

【Zマーク】

Z3377

【作者名】

飯田

【あらすじ】

少女アリスが不思議の星「青い惑星」をだらだらと冒険します。いちおう恋愛も予定しています（*^○^*）

不思議な冒険

「…………？」あたしは誰？」

一人の少女が目を覚ました。

驚いたようにキョロキョロあたりを見回します。

「マジ……？」あたしは…………うーんとお…………」

体にかかるGがなんか違つみたいで。あつ、Gといつても重力のGのことですよ。

「体が重い。えいつ！」

少女は上半身を氣合いで起します。

「わあ、ヤバイ、キレイな景色」

自分がだれかも分からぬのに思わず見とれる少女。

「青い空、緑の森、そして……」

少女はちょっと首をそらして目を閉じます。

「…………」自分がだれなんだか思い出しそうな感じ…………

「…………アリス、アリス」

「… そりよあたしはアリス！ 青い惑星のアリスよ」

少女の顔に喜びが差します。

「そりだわ、あたしが『青い惑星のアリス』なんだから、こりは青い惑星に決まってるわ」

アリスは皿を開けて満足げに空を見上げます。

青い空がどこまでも続いて視覚に『青』が染み渡つてきます。

「さすが、青い惑星だわ」

アリスの不安が一気に解けていきます。

「あれ、？」

へりへ

不思議な冒険2

アリスはそのとき、空に小さな物体を見ました。
それはすばやく動き方をして、つよいピンクに光ります。

「なにあれ」

アリスが田を凝らしてみると、一つだけ光が一つの間に分かれ
て青い空を飛んでいます。

「うわっ、増えてるし。なんか、ヤバくね」

アリスの田に不安の色が広がり、とにかく立とうとします。が……。

「体重つい！ 立てない」

必死で試みますが、アリスの体はマジ詫のように重く感じて立てません。

「あたしが重いわけないわ！ こんなにスリムなんだから！ そう
だわ、こんなにあたしを重くするこの地点の重力が間違ってるんだ
わ。……この重力、ちゃんとしなさい！…」

アリスが命令口調で叫び、体の重みが急に無くなつてきました。

「あつ、立てる！ こんなに体軽くなつた。わあ～い！」

解放された気分で、キャアキャア喜びながら逃げ出します。

「あ、あれ。さつきの光、いつの間にか無くなつてる」

少し駆けてアリスがそのことに気が付きました。

「不思議な光、どつかいつちやつた。まあいいか。……何だつたん
だらうあれ」

わらわらの縁髪をなで下ろしながら、アーモンド型の目が後ろを見
ます。

透き通るような白い肌が紺のブラウスに覆われて、肩には縁髪が垂
れる、そんなアリスは、確かにスリム、いえ、むしろ華奢に見える
少女です……ほんとです。

「そうよ、怖いのもいなくなつたことだし、こんなに軽くなつたん
だからちょっと探検してみよつ」

アリスの細い脚が、次々にスカートから出されていきます。

「わあー、空気がおいしい。青い惑星サイコーー！」

「あれ……、あの子……」

つづく

不思議な人の冒険③

「あれ……、あの子……」

アリスは向こうにたたずんでる少年に気づきました。

（あの子、どうかで見たことがある。誰だつたつ子……）

アリスは静かに目を開じて、また首を後ろに反らせます。

（うわすぬと思へ出せるから。……ジャック、もうジャックよー。）

アリスが少年のまつを見ると、いっぱいの笑顔でじつに顕けてきます。

「ジャック、ジャック！ あんた何でここに？

少年がそれを聞いて、いきなり固まります。表情も見事そのまま。

「どうしたの、ジャック。急に」

少年の顔が、笑顔から怪訝な目に変わりました。

「ジャック？ なに言つてんの、ぼくはベルナールだよ。ねえ、アリス」

少年の表情が心配そうなものに変わります。

「「うわ、あなたはジャックよ。あたしが間違ってるわけないわ。そ
うよ、ジャック、あなたはベルナールじゃなくてジャックよ！」

少年が一瞬感電したみたいになると、また笑顔になつてアリスに話
しかけました。

「わう、ぼくはジャック、じめんアリス、自分のことなのに間違え
て。アリスが正しい。ありがとう、ちゃんと言つてくれて」

色白でブロンドの美少年が、アリスの手をとります。

「いいのよ。だれにも間違うことはあるんだから。ジャック……」

「え？」

「あんたってほんとキレイな子。あたし悔しくなるよ

「や、そんなこと、ないよ」

ジャックは戸惑います。（アリスは女じやん。ぼく男なんだよ。そ
れなのに悔しいなんて）

アリスの手がジャックの手をとつて、彼のカワイイ唇に伸びます。

「なによ、この風。ばつかじやない、キレイすぎ。もう、ありえな
いんだから」

アリスの人差し指はジャックの唇をなぞつて、そつとその間に入れ
られます。

「だめ！ じつとして。キレイな顔……。憎らしきぐらー」

アリスは人差し指を抜くと、自分の唇に当てて、リップを塗るようになぞりました。

唇が濡れて、光ります。

「……」

「……」

つづく

不思議なやさんの冒険4

「……」

「……」

アリスの頬が濡れて光っています。

それをジャックが恥ずかしそうに見ています。

沈黙のひととき……。

「なんであんなことしたの、ア……」

「やつだジャック！ のど渴いた。なんか飲むもんちょうどい」

アリスがジャックの言葉を遮るように、いきなり言いました。さつと、やつきのことに照れ隠しなんじょうけど……。

「ねえ、飲むものあー！ 昇くちょうどいよ」

ジャックはかわいそうに、こんな大自然のなかで飲むものを買つてくれるとはできません。

「ムリムリ。アリス…… イジメないでよ」

美少年ジャックの目が、もう涙目になってしまいます。

長い睫毛を涙の雫が渡つて、つすいピンクが差した頬に流れていきます。

ます。

「あんた、泣いてんの？ てか、あんただって困るでしょ、このまま水分とれないと…」

それは正論です。

「ねえ、どうするつもつなのジャック。あんたはここに来る前どうしそうと騒ひたの？ てゆうかさ、あんたはなんでここに来たの？」

これは「嘗々めぐつ」といわれる状況のようです。

「ほくは……木こりのジャンさん用があつて、森に行く途中だつたんだけ……ジャンさんとこはもう、そんなに遠くないから、向こう行ってから飲めると思つてたんだ。でも、アリスは今、水欲しいんでしょ……我慢して一緒に来てくれた、ジャンさんの家で飲めると思つただけ……どう、アリス？」

ジャックの母が、頼りなげにアリスを見ます。

「やう、やうだつたんだ……。あたしジャックがそこまで考へてないと思つたから。……あたし、ほんとは、のどなんか渴いてないんだ。ジャック、キレイなあんたをイジメたかったの。あたしのこの気持ち、分かつてくれる？ でも言つとくけど間違つてないから、あたしさ」

アリスの母が、ジャックをしつかり見据えます。

「うん。わかった。じゃあ、一緒に行こう」

美少年ジャックの手が、アリスの手をとり、2人は歩き出します。

「ジャック」

「え？」

「……なんでもない」

つづく

不思議なやさんの冒険5

アリスとジャックは深い森を進んで行きます。

「ねえジャック」

「うん」

「背中にキモイのがくっついてるんだけど」

アリスが緊張します。

「え、……ひょっとしてヒルかな」

意外と平気なジャックです。

「なんかナメクジの大きいみたいのが、吸い付いてるんだけど……

アリスの声が震えています。

「やつぱヒルだ。あ、ムリして引っ張らないで、皮膚が破れるから」

ジャックの冷静な受け答えに、アリスは歩きながら慌てます。

「キモイから引っ張るなんてムリだよー でも、どうするの？ このヒル……」

ジャックの顔が意外にも笑顔になります。この美少年はアホなので
しゃつか……。

「ヒルは血吸つて腹いっぱいになつたら自分で落ちてくから、大丈夫」

ほんとでしょうか。

「ほらアリス、もうそこがジャンさんち。早く行こう」

少し開けた場所にすてきなログハウスが建つてます。

「あれそり?」

「うん。いいでしょ、あの家」

うなずいたアリスが、ついでに気になるジャックの背中を覗のる恐る
見ると、ヒルがぽどり、と落ちていきました。

「わあ、ほんとだ」

「アリス、行くよ」

つづく

不思議な冒険6

「 じんにちば、 ジャンさん」

ジャックが元氣いっぱいに挨拶します。

「 ああ、 じんにちば。 ベルナール」

背の高い、 締まった体のたぶん30ぐらいのおじさんが高いところの笑顔で出でてきます。

でも、 あれ…… この人たしかベルナールとか呼んでましたけど……。

「 じんにちばベルナール、 待つてたよ、 早く入つて」

少年は入り口で戸惑つてます。

「 ベルナール、 なに気分でも良くないのか」

少年は重い口を、 やつと開きます。

「 ジャンさん、 ぼくはベルナールなんかじゃないよ。 ぼくジャックなんだけど」

ジャンさんは両手を上げて、 あの「お手上げ」のポーズをします。

「 大人をからかつたりして、 まつたく……。 いいから入りなさい」

ジャックとアリスは家に入ります。

中は意外に広くて、奥にまだ何部屋かあります。

2人はテーブルに並んでつきます。

アリスがジャックの脇腹を突きます。

「ねえ、あんたがベルナールってどうゆうことよ。あのジャンってオヤジ、人の名前間違ってるわよ。失礼だわ」

ひそひそと囁くアリスに、ジャックが困った顔をして答えます。

「うん、でもぼくだつてさつき、アリスと会つたとき、自分の名前ベルナールつて、間違えちゃつたんだから、ジャンさんはことは責められないよ」

人のよけいな顔でジャックが言つのを、アリスはムツとして聞いてます。

「ベルナール、このカワイイお嬢さんは誰。カノジョか？ なんて名前？」

ジャンさんがテーブルにジュースの入つたコップを並べると、笑いながら訊いてきます。

「このはアリス、アリス・ド・マーニュ。友達だよ

ジャックの慌てた顔が赤くなつてます。

「ふーん、そうかあ、友達ね」

ジャンさんが楽しそうに言いながら、テーブルについて2人と向かい合いました。

「ちよっと、あんた！ 黙つてきいてりや。あたしはアリス・ド・マー二コなんかじゃないわよ！ あんまりふざけてるとウラ拳がましますよー！」

アリスの目がキッヒジャックを睨みます。

「え、そんな……アリス。無茶苦茶言つてイジメないでよー！」

と同時に、一瞬にしてアリスの裏拳が決まります。

椅子から飛び落ちるジャックの体。美少年の彼が悶絶します。

「あたしは青い惑星のアリス。ジャックのばか！ ジャンさん、この子くんなどいりでふざけるんですね。イヤな奴！」

つづく

不思議ちゃんの冒険7

「立てるか、ベルナール」

ジャンさんがアリスの横でジャックを抱き起^レそうとします。

「う、うん……。駄目みたい」

見てて情けなくなつたアリスが、2人に向かつて言い放ちます。

「2人ともまつたく！ ジャック、甘えてないで立ちなさい！ ほ
ら早く！ それにジャンさん！ なんですかあ！ さつきつからジ
ャックのことベルナールつて言い続けて。ジャンさんつて頑固なん
ですね！ あなた相手が子供だからつて失礼ですよ」

アリスの声に、床（『とこ』じゃなく『ゆか』！）にいる2人がお
びえます。

「お嬢さん、かなりツンなんだね……。ジャ、ジャック、そろそろ
立てるか？」

「う、うん……、もう大丈夫だよ～」

アリスがテーブルからジャックを見下ろして冷たく言います。

「だつたら早く立ちなさいよ。……ほら大丈夫なんじやん。あたし
の裏拳がまるで効きすぎみたいにして……デリカシーないわよ、ま
つたく」

ジャックはそれを机と椅子に座つて、またジュースを飲み出します。

ジャンさんはアリスのことを引いた顔で見ながら、何か話題を作ろうと、考へてるようです。

「あの、アリス」

ジャンさんが思い付いたように言います。

「もういえべきみはこのあたりに見かけない子だね。服装もジャック、そうジャックの友達にしては、かなりいいし。きみは、どつかH-Hといの子なの？」

アリスの瞳がキラリと光ります。

「おじかで……」

「え、は、はいっ！」

つい

不思議なやんの冒険8

「……おみは、どうかHエといの子なの？」

アリスの目がキラリと光ります。

「おじさん……」

「え、は、はーっー」

「それって、あたしにボケ期待してるんじゃないわよね……あの偉大な芸人さんの鉄板ネタの……」

ジャンさんは口笛を吹いて、『じめかそつとします。どうやらアリスの勘は当たつてたようです。

「おじさん、あたし責めてると思つ? あたしこんなに気取つてゐけど、偉大な逢坂のお笑い文化は、理解してゐつもりよ。学校の授業でもやつたし……。だから、あたしボケるからちゃんと聞いてて」

アリスはカワイイ顔を、一気にしかめて自信満々に言い放ちました。

「だれがHテ「の子やねんつーーー」

それとほとんど同時に、ジャンさんの口笛も美しく決まります。

ジャックは残念ながら2人の世界が分からぬようだ……おじおじして見ていてます。

「アリス」

「ジャンさん」

2人の目が輝きます。

「よし、きみとは意外にも波長が合つたから、お絵かきもうしよう！」

アリスがカワイイ笑顔になります。

「お絵作るの手伝おうか？ ジャンさん」

ジャックは会話からぽつんと取り残されます。

（……アリスが自分からお手伝い？ おかしいなあ、そんなキャラじゃないはずなのに……）

ジャックの頭にふつとある言葉が浮かびました。

（……オヤジキラー……）

つづく

不思議なやんの冒険⑨

「ジャンさん、次なにしたらいい?」

いつのまにかカワイイプロンをつけたアリスがキッチンで微笑みます。

「タマネギみじん切り、大丈夫? やれる?」

ジャンさんがウサギの肉を切りながら、顔を上げずに言います。

「うん、たぶんできる。やってみるね」

まな板にタマネギを乗せて……、アリスの手が止まります。

(「んなに口口口口じてのを、じつみじん切りじろりてこのよ
! あのオヤジ。でもたぶんできるつて言つたやつたしなあ……そ
う、ジャックに聞いてみよ!」)

アリスがテーブルで待つてのジャックを見ます。

「ジャック暇そうね! ちよっとだけ来て!」

めんどくさうにキッチンへ来ました。

「なにアリス」

「ちよっと、タマネギのみじん切り教えてよ」

アリスが食い入るよ^うに見つめます。

「知らないよ^ほぐ。料理なんかできないもん」

アリスのカワイイ顔が微笑みます。

「あんた、あたしに恥かかせる気? 今、ビ^ビト^ビシ^シチ^チコ^コー^ショ^{ショ}ン^ンだか分かってるわよね」

ジャックの目が、まな板をゆっくり口く苞^{ハグ}に留まります。

「うん、分かる」

「今度はさ、やつきの裏拳みたいに済まないと思^{ハシ}けば^ビ」

「あ、はい」

「いけませんねえこれは……よい子のみなをさせつたいこマネしないでね。

「だつたら教えてよ

美少年ジャックの目が、まだタマネギを切つてもいないので、大粒の涙を流し始めます。

「まだ切つてないわよ。なに涙流してんの

「まく、代わりこ^ハる」

アリスが呪^ハいてる苞^{ハグ}をぱつと取つて、ジャックがタマネギをまな

板に置きます。が……手は動かず……。

「ええいっ！ こんなの一つ！ タマネギ」ときがあつ……。」

すさまじい速さで振り下ろされてく包丁。まな板には、タマネギのみじん切りがちやんとできています。

「うわっ、マジ……。ジャックやるじゃーん！」

アリスの皿が、見直したよつにジャックを見つめます。

「どうだーっ！ ……はー終わったあ」

皿に満足に漫るジャック。その横でアリスが不思議そつな顔をします。

「切ったの赤タマネギだったっけ、ジャック？」

アリスの言葉にて、陶酔からむりやり引き戻されたジャックが指の激痛に初めて気づきます。

「い、いだあー！ たあーっ！」

「タマネギビーブー、切れた？」

つづく

不思議な冒険10

それから約20分後……。

「どう、料理のまつは？ ウサギ肉のソテー、初めて？」

ジャンさんの和やかな質問に、アリスはナイフとフォークを動かしながら答えます。

「うそ、初めて。やわらかくおいしい。ジャンさん、このハーブなんていいの？」

アリスは、いい香りに田を瞬ります。

「それはオレガノ。気に入つた？」

ジャンさんはアリスに微笑むと、自分の隣りにいるジャックに、肉切れをフォークで運んで食べさせます。

「ジャック、おいしいだろ？ 欲しかつたらまつてくれよ。おれが口に運んであげるから」

ジャックは両手を包帯でぐるぐるに巻かれています。

「ありがと、ジャンさん」

アリスの田線が、時々ジャックの手に行きます。

「ジャック、それじゃ困るでしょ、これから」

ジャックは偉い少年です。もとはと言えどアリスのせいなのに、ひといじのよひな彼女の言葉にもキレたりしないのです。

「うん。でも家族とか友達が、いつもより優しくしてくれると思つ。ケガするとみんなそうしてくれるもんなんだ」

アリスはそんなジャックを見つめます。

「友達のあたしにも優しくしてもらいたい？」

「え、うん」

アリスのフォークが向かいからヒュッシュと伸びてきます。今度は何の責め技だらうと、ジャックは緊張しまくりますが……。

「ほひひひ！ よかったなあー、アリスはほんとは優しくて

ジャンさんが、アリスのフォークから肉を食べているジャックを冷やかします。

「カップル成立ーっ？」

ジャックが口にしたフォークを、べつに気にせず使うアリス。

でも、あれ……顔を赤くして……アリス

不思議な人の冒険1-1

…… やれやれ、 今日のお前は朝からいつもよつと酷くて……

…… 夫のぼくをジャックジャックって、 初恋の子の名前で呼んだり

……

…… ヘルパーのジャンさんにまで、 ぼくがベルナルルじゃなくてジャックだと言はったりして……

…… 奇行もかなりだ。 このジジイのぼくを「あれいで悔やしい」とか言つて、 口に指を入れてきたり……

…… め前の如前ジャンさんに言つてたら、 わけい勢いで殴つてきた
り……

…… それにお前は今日、 朝からどつかに旅してゐるよつな錯覚がある
みたいで…… それも初恋の子ジャックと……

…… アリス、 でもぼくはかまわないんだ。 お前はもう「不思議の星
の人」 なんだからさ……

「アリス」

「アリス」

つぶやく

不思議なやんの冒険1-2

「アリス、靈獸がそっちいっただぞ」

アリスは田をキョロキョロさせます。

いきなり前に広がる草原。

一面空はくもり。

風が吹き付けていて……。

「アリス！ 靈剣を！ 早く出せ！」

アリスの記憶にあるこの世界……たしかずつと前、同じじったような……。

「アリスーっ！」

声の主を確認することなく、自然に動く体。

アリスは地を蹴り、高く舞い上がる。

次の瞬間、姿を現した竜のような巨大靈獸を、アリスの右手からタイミングよく突き出した剣が捉えて、頸を突き通す。

吠え声を響かせてもがきながら、アリスを宙に放り出す靈獸。

「アリスーっ、お前の守護精靈を！」

宙に舞うアリスに囁く声、スローで展開する光景。

（だいじょ「ひぶ、心得てるから）

アリスの目が閉じられる。

「守護精霊よ、出でよ！」

いきなり光に包まれるアリス。そして自分より小さな女の子3人が、宙を舞う彼女の足にキスして支える。

「アリスさん、お久しぶりです。あなたの守護精霊のメンバー、リナとセナとマナです」

アリスは頷いて、守られいる光の中で精霊たちと話した。

「メルカーレードの父の具合は？」

「かなりお悪いです。靈剣の継承を急がれていらっしゃいます

「まだ錯覚とかあるのか、悪霊のせいで」

「はい、残念ながら。以前よりもますますお悪くなられて……」

「せうか……、私も」」」」が潮時なのかも知れない」

アリスは光に包まれたまま地上に下りたつた。

彼女の視界に映るなつかしい仲間たちの顔……。

「アリス、召喚したかいがあつた。異界からの無事帰還、おめでとうー。」

それは古くからの戦士仲間、ベルナルルだった。

「アリスお姉ちゃん、あたし剣の腕上がつたんだよー。見て見て、ほら」

少女が笑いかけて、自分の守護精霊に剣をふるつてみせる。

「あぶねえなー。ミントー。」

かわいい男の子の守護精霊が少女の剣を難なく避ける。

「あ、こりつー！ 段どつといたのに無視したわねーーー。」

アリスが仲間たちと苦笑する。

追いかけっこする妹ミントと精霊の男の子……。

「あいかわらずね、ミントは」

アリスの目が楽しげに2人の姿を追っていた。

つづく

不思議なやんの冒険ー3

アリスたちが草原を抜けて田舎町にやって来る。

「リリならちゃんと結界ができるから安心だ。しばらくはこの町に身を置いて」

午後の光を受けて町のメインストリートを歩く戦士たち。その後を守護精霊たちが続く。

「アタシのアリスさんは強くてジャバいんだから。ヒトスのミントさんは？」

男子の守護精霊ヒトスが吹きそうになる。

「ミント？ やつを見ただけーあのへなひよーな劍。つねにくわがままなだけのただのガキや。戦士なんて言えたもんじゃない」

「わー……。ヒトスは大変だね。へなちょいさん守んなきやならなくつて」

戦士たちの後ろなので聞こえないと思つてゐる守護精霊たち。

「うん、 そうだよハハハハハ！」

セナが慌ててヒトスの口を押された。

「なに笑つてんのー。じつせうくな」とじやないでしょ？

ミントだった。

「い、いてーなあ！ 耳放せよー！」

「ふん！ 守護精霊のくせに。あたしと歩きなさい。精霊同士だと、なに言ってんだか分かりやしない！」

ミントが耳を引っ張つてエトスを前に連れ出す。

「おー！ ミント。そんな乱暴しちゃ守護精霊に悪いよ。守ってくれなくなっちゃうぞー！」

戦士の一人、アールが冗談まじりで言つ。

戦士たちに起こる笑い。

「いいもん、こんなの。生意氣だから、あたしが主人なの分からせるのよ」

ミントのまだ幼い声が言つセリフに、みんなウケた。

つづく

不思議なアーリアの冒険1-4

「アーリアが俺たちの身分になるとこだ」

戦士クアドランがアリスたちに一件の中層マンションを指し示す。エントランスにはセキュリティーガーデンがしっかり施されていて、彼らのような流浪の者など入り込む余地もないよう見える。

「ムリじゃね？ 中に知り合いでモいんの？」

ダルトンが顎を突き上げて、クアドランを見る。

「心配するな。俺たちは戦士階級だ。不審者の類いじゃないだろ」

アリスがエントランスを見ながら訊く。

「関係ない、戦士の身分など……私たちは、知らない者の町では不審者と変わりない。クアドランビツの氣だ」

彼の青い瞳が光る。

「簡単だよ。俺たちが戦士階級であることを機械に分からせてやるだけさ」

アリスの不安げな目。他の戦士たちも「それはありえない」という顔。

「俺はやるよ」

一人だけ認証機の前に行くクアドラン。

腰に帯びた靈剣を抜き、認証カメラの前で構える。

そのまま1分ほどがたち……、ドアが開いた。

「マ、マジで……」

「意味分からぬ」とゆう顔をして、しゃべりながら入っていく戦士たち。

「クアドラン、今のは？」

アリスが好奇心を抑えてクールに尋ねる。

「靈剣認証だ。最近の機械はできるようになつてゐる。驚いただろ？俺が『実力』で、戦士であることを証明すると思つたんだろうが……」

クアドランのニヒルな笑い。

「私の靈剣でもできるといふことが」

機械音痴なのを隠して、アリスはわざとクールな戦士を気取つた。

不思議なやさんの冒険1-5

マンション4階のエレベーターホールに出る彼。

「部屋はどこなんだ。クアドラン」

アールが辺りを見回しながら訊く。

「驚くなよ…… 10の階すべてだ」

アールが驚くよりも早く、仲間が一斉にため息をつく。

「マジで?」

「ああ」

「だつて、何部屋だよこい……」

「ゼット一〇戸つてことだろ。それも…… ほら開けたから試しに一戸入つて何部屋か確認して見ろよ」

いつのまにクアドランが鍵を開けている。（だが戦士階級の特権は、まだその程度のものではなかつた……）

「へえ…… 4部屋ある。それにダイニング、キッチン……」

アリスも彼らに混じつて中を見て回る。一つの部屋で20平方メートルぐらいはある。

「でもこの階全部空き部屋ってわけじゃないだろ?」

アールが興奮ぎみに言ひ。

「いや、全部空きだ。そつか……まだ知らないようだな。どんなタイプであれ、マンションの4階と9階は全部、戦士が自由に使えるようになっている。これは『死』と『苦』を連想するものを忌み嫌つた平民が出した苦肉の策といつたところだな」

アリスは代々戦士階級の家柄だったが、集合住宅に住む必要がなかつたため、そんなお得な情報など知る由もなかつた。

「私は遠征のときも、ちゃんと金払つてホテルに泊まつてたが……」

悔しそうなアリスにクアドランが冷笑する。

「それも方法としてはありが……戦士が情報不足なのは致命的なのでは……」

つづく

不思議なやがれの冒険1-6

夜、マンショוןを出てアリスと仲間のうち3人がメインストリートを探検する。

「やっぱ田舎町だな。遊べるとこなんかほどんどねえーし

ダルトンが吐き捨てるよ！」話題。その手をしつかり握る女の手の守護精霊ミオとミオ。

「お前いつのまに2人を出したんだ？ まあ婆は子供でもヒトじゃないわけだから、夜連れても問題ないんだろ？ が……」

尋ねたアールは守護精霊を出さないでいた。やはりその外見を考へての「じりじり」。

「なによアール。精霊の力を信用してないの？」

リオの子供らしく甲高い声が響く。

「あたしたちのダルトンさんなんか、キャラはキャラこなじゅんと信じてくれるよ」

「くく、だつてさやや！ ここから俺のファンつてわけー わわわ

呆れるアール。そしてふと、あるものが 田舎町まる。

「精霊？ あ、ちがう、『ヤンキー精霊』」

夜の町が似合ひてる彼ら。関わればかなりの戦士でも危ない存在だった。

「なんつすか?」

彼らがアールに目をつけて寄つてくる。

「ベ、ベに……」

アールほどの戦士も緊張を隠せない。

「あれー、なんか具合悪そうですね、戦士さまでよろしかった
ら私たち精霊が面倒見ますよ……ってセリフ、言つちやつたよお俺
www」

ヤンキー精霊たちの爆笑。

「アール、お前じやムリだ……守護精霊を出せ、おいアール」

ダルトンのキャラクタが全くなくなつてゐる。事態の深刻さが却つては
つきりする。

「俺は、呼ばない

「えつ

ダルトンと仲間たち全員が思わず息を飲んだ。

不思議なヤンの冒険17

戦士アールが守護精霊を出すのを、頑なに拒んでいるのを見たヤンキー精霊たち。

「え？ 自分だけで充分とか思つてます？ もしかしてあんたも、自分の守護精霊のこと信じられないとか……」

彼らのうちの一人、レンが急にマジな顔になる。

「そーゆーの1番ムカつくんだよねー、『守護精霊つて、結局子供だから』みたいな」

アールの右手が靈剣を出そうとして躊躇つ。

警戒しながらあることに気づいたアール。

（やつか、ここにから守護精霊のドロップアウトなのに、彼らよりずっと成長して見えるのは、心に傷を負つてムリしてるからなんだ）

レンの姿は、もう一5歳くらいで普通の守護精霊よりずっと年上に見える。他の奴らもそうだった。

アールの手が止まる。やっぱ靈剣は出さない……。

「ムリだ！ アール！」

彼の態度に完全にキレるレン。

「俺のクソ主とおんなじじゃねーか！ なめてんじゃねーっ！」

ヤンキー精霊レンの攻撃が始まった。

アールの視界から彼が消える

と同時にアールの意識が途切れ途切れになる

遠くに聞こえてるアリスと仲間たちの叫び

そして急に広がる光と花畠

疲れたアールはそのなかにダイブして

安らぐ。「なんだ、全然悪くないじゃん、あのヤンキー精霊くん。とゆうか却つて気持ちいいし」

夜の街頭に転がるアールの冷たい体……。

その表情は安らぎに満ちていた。

「……アール？ アールっ！？」

つづく

不思議なやさんの冒険1-8

「アール……」

駆け寄った仲間たちが争つて冷たくなった体を抱く。

「おい！ アールっ！」

悲しむダルトンたち。

アリスの顔が涙に濡れながらヤンキー精霊たちのいるほうを向く。

「おーっ、次はお姉さん？ でもちゃんと守護精霊出してよ~~~~~
じゃないと今みたいに話になんないからさ~~~~~」

レンとは別の奴が笑つて言ひ。

「いいよ……ほんとは、つらいくせに……私は守護精霊を信用して
る。彼女らはお前たちと違う！ アールの心も分からなかつたお前
たちなんかとは！」

アリスの目が閉じて静かに言つ。

「守護精霊よ、出でよ」

一人マナだけが現れる。

「アリスさん、状況は分かつてます。あたしだけで充分です。まか
せてください」

そつぱつて夜の街頭に堂々と彼らを向かえ立つマナ。

その幼い顔が、しつかりヤンキー精霊たちを見つめる。

「ほひ、やるかガキ？ メンチきりやがって~~~~」

「えうよ。あんたたちと違つて、やせんと守護精霊の仕事をさせて
らひわー。」

連中がざわめく。14人全員がマナに突進していく。

「うわーっ！」

「めんな、レン。お前のこと呼ばないで勝手に戦つて死んだり

して。お前を信じて頼るべきだったのにな。俺バカだった。」

「めんな、お前のことを信じてあざられないで……」「ゼルムさん
だま……温かい胸

「温かい」

「めんな、お前のことばつと守つててくれたの……」「クロー

……

……

……

「めんな、温かい胸

「めんな、お前のことばつと守つてくれたの……」「クロー

「温かい」

……

「あれれ……、いいんです、あつ……あつたかいですノルムさせれ」

14人の小さな子供たちが、『手持のよとひ』の周りで寝ていた。

つづく

不思議なやがれの冒険1-9

「ふふふ、よく寝てゐる

さつきまでの姿が、うそのよつこ、幼い姿で眠る彼ら　もう今は、完全に守護精霊に戻つていた。

マナの目が、それぞれあるじのもとへ消えていく彼らを見る。

そして……残つた一人……主を亡くした守護精霊レン……。

5歳ぐらいの外見に戻つた彼は、いつまでも消えないで夜の路上に眠つこんだ。

「そつか、この守護精霊、帰るところないんだ……じゃあ、あたしがお姉ちゃんになってあげる」

幼い声で優しく言い聞かせるマナ。

彼女の小さな体が眠つてるレンを背負つ。

一人のことを見守るアリス。

マナのうれしそうな顔。

「アリスさんー、この守護精霊、今日からメンバーですから。えーっと、名前は……レン」

アリスのまづに歩いてくるマナ。

「うん、分かった。みひしへ、ね

アリスの手が、眠っているレンのカワイヤイ手をやつと触る。

「行こうか。……今日は嬉しいことと悲しいことが一度に来りやつて、もうパニクりそうだけど」

とつづにマンションへ帰つたらじい戦士たち。

アールの遺体も一つのまに収容機関が回収済みで……。

田舎町の夜景に、三人の背中が小さくなつてつて……見えなくなつた。

つづく

それから数日後……

アリスの実家に仕えるジイ（爺）、
昼間の町を急ぐ一人の使者
ラルフだつた。

「急がせた急がせた……、おー、あれじゃあのマンシヨンじゃー。」

昔は超イケメンだったのが今でも分かるテルアラビア

アリスがドアフロンに出る。慌てた爺の顔……。久しぶりに見る。

一筋、どーしたの急に？」

お父上が 大変でござつて

え……、いいから来て

まもなく部屋に来る爺

「アリスさま、た、大変でござります。メルカレードのお父上が失踪されました！ ああジーしましょーアリスさま！」

挨拶もなしにいきなり話す爺。

部屋にいたベルナルが心配そうに顔を出す。

「おー！ これはベルナルさま！ あなたもよく存知のセラフ

イム卿が悪靈にたぶらかされたといつひ出奔なされましたー。」

爺が、すがるよつてベルナールの手を握る。

「そりや大変だ。でもちよつと掛けて落ち着いて……」

ソファーを指して座らせる。

アリストベルナールは向かいに来る。

「ふうーつ。あ、そつじやつた、挨拶がまだでしたな。……アリストさま、ベルナールさま、お元気なよつでなによりです」

爺が交互に見て微笑む。

「で、失踪の件でござりますが……アリストさまには直ちにお帰り頂いて、当主の代理を務めて頂かなくては……」

爺の目が迫る。

「わ、分かつてゐる。私も覚悟はできてたから。それで、父の靈剣は……まさか」

爺は小さく頷いた。

「そのまさかでございまして……だから大変なのでござります。恐らく悪靈はお父上の靈剣の魂になつて……おおー、考えるだけで身震いする……」

爺の顔が青ざめる。

「でももつと心配なのは……父の守護精霊たち、じゃない？」

「アリスの言葉に爺が固まる……」「そ、そうでした。守護精霊たちも、もちろん悪霊と一緒に……そのうちの一人はアリスさまと、もつ一人はミントさまと兼務でして」

アリスが言葉を失う。

……

つい

不思議なやさんの冒険2-1

「……守護精霊たちも、もちろん悪霊と一緒に……、もう一人はミントをまと兼務でして」

……

同じ日、町の商工会で依頼された「地産つまごもの物産展」の警備にあたるミントたち。

「これ、やっぱあたしたちには役不足よ。……わざわざ戦士を雇わなくつてもいいじゃない、こんな感じ。……。靈獸なんか来やしないつて。結界あるし」

ミントが愚痴りながら、わざわざ「星うどん」をすすつてゐる。

「わあわあ、どうも遠慮なやう。戦士のみなやめー。」

わざわざから警備のミントたちに媚びまくる主催者の念書。彼にしたら、これがきっかけで、戦士階級といつて安定的な顧客を、捕まえられるかもしれないのだった。

「ねえ、Hトス。あんたは精霊だから食べないし。マジでいる意味ないじゃんね。Hトス？」

ミントが口の中でのぞみをばくばくせながら見る。

側で笑う仲間たち。

「ねえ、エトス！ 聞いてんのぉー！ あるじの『ハーリ』とーー。」

守護精靈エトスはさつきまでと違つて、なんにも言わなかつた。いつもミントには必ず口答へするのに……。

「エトス、……なに真面目いの？ ちゃんとあるじのあたしを見て言ひなやこつーー！」

笑つていた仲間のうち、クアドランが異変に気づく。

「ミントあぶないーー！ そいつから離れてーー！」

ギクッとする彼女。突然そう言われると却つて動けなくなる。

エトスの体が急に「暗く」なつていき、輪郭だけ残る。

「な、なにあんたー？ そんな術使つて……」

さすがに泣き出したミント。幼い顔を涙でグシャグシャにする。

「ヤバつ、……遅かつた」

クアドランの不気味な言葉と同時に、エトスの形にできる闇から巨大靈獸が抜けて出よつとする。

「悪靈が……、結界を破つた……」

エトスの輪郭が靈獸に押し広げられて膨張し、突き破られる……

「ヒース……？、やだ、やだよーつーー、わつやめよーつーー。」

クラゲドリーンの手と靈獸のカギ爪がほととぎす回轉ヒントに伸びた……

つい

不思議ちやんの冒険22

「うわーっー！」

来場客の驚きと悲鳴。

次々に逃げ出す人々……。

彼らの顔が、ときどき靈獸のほつを振り返る。

巨大な体に、大人の靈劍を構える女の子が乗っていて……

その瞬間、ミントの体がパッとクアドランに向いて、妖氣のようなものを漂わせながら彼の腰の靈劍を抜き取る。

かばおうとして伸ばされた彼の手が止まって、ぶるぶる震え出す。

……クアドランの目が、自分の鳩尾みぞおちに刺さった靈劍を見る。……俺の靈劍……その柄を握ってる、まだ子供の手……（え、ありえないだろこんなのって）

スロー再生のような映像……現実……。

いきなり再生が戻ったように、倒れかかるクアドランを猛スピードで靈獸のツメが切り裂く。そして靈獸に駆け乗った女の子……それはクアドランの靈劍を握るミントだった。

「ひでえーっ！ うううー！」

仲間のダルトンが悔しそうにわめく。

一斉に彼を引っ張つてダッシュする仲間たち。

辺りは和やかな空氣から一転、パニックのただなかにあった。

「お、俺は信じない、信じないぞこんなの一、うそだーーー！」

半狂乱になつてダルトンが暴れる。

しかたなく、逃げながら彼の四肢をそれぞれ掴む仲間たち。巨大靈獸の上から、別人のようなミントが人々を見下ろす。

「なんでそんなに怖がるの？ 悲しくなるからやめてよ……。やめてよーーー！」

ミントの「うるな皿に涙が溢れてきた

ルシファー、アタシ悲しい。悲しいよ……。

つづく

不思議な冒険23

ミントの語りかける先に、華奢で優しそうな超美少年が現れる。

靈獸の上で一緒に座る彼ら。

「ルシファーね。あなたを見るの初めて。……もつと怖いと……。
意外」

ミントが彼の顔をまじまじと見る。

「驚いた？『悪霊』のイメージと違います？」

ミントが大きく頷く。顔が赤くなつてる。

「君は、ミント。戦士。とっても元気なんだよね、ほんとは。でも、
ぼくがきみのこと守護精霊つながりで支配したばかりに、こんな
に温和しなつちやつて。ごめんね」

美少年の顔が困ったように笑う。ミントの顔が熱くなる。……初恋
？

「うう。あなたといふと心が落ち着く。だから、だよ」

ミントの中でもうきのことが蘇つて、涙がまた出でくる。あの悲し
み、自分が怖がられているつらさ。（アタシはただ、弱いルシファ
ーを戦士だから守つただけ。これからも守る、誰と戦うことになつ
たつて……）

ミントが、ルシファーに憑かれる前よりも、しつかりして見えた。

「おー、今がチャンスじゃないのか？ 戦士のみなさん」

戦意を完全に喪失してゐるダルトンたちに、壯年の商工会長が訊いてくる。

「なんだ!? ゼザマは!! 戦えないお前たちなんか戦士と呼べるか!! 今日のこと、責任持つて償つてもらいます。これがご縁で、今後お付き合つても長くなりそうですからね」

ヒトまみ出しひの余韻が、まるで「悪魔のよつこ」笑つた。

「あははははー！ 今日はおかげで、おこしいお得意さまができたー！」

靈獸の上では、ミントの胸に顔を寄せて、美少年ルシファーが安心する。

「ありがとう」

へへへ

不思議なやんの冒険24

巨大靈獸がまだ動かないのを見て、商工会長は携帯端末で誰かを呼び出す。

「あー、私だが。ジョレン、靈獸が今居るんだがやれる雰囲気だから、緊急に新しい武器回して欲しいんだ。……そう、試験も兼ねてということでいい。やり手武器商のきみを信頼してのことだ。できるだろ？ 代金は今回はずむ。それに戦士はもういるから、派遣をちょっととくれればいい。……分かった。すぐだぞすぐ」

会長の目が、疲れきっているダルトンたち戦士を見る。悪魔のよくな笑い……。

「お前たち！！ 今から武器が着くから、テストも兼ねて戦つてもうつよ！ くれぐれも雇い主はこの私であるのを忘れんな……」

戦士のうち、オーウェンが会長に寄つてくる。

「おまえ……、あの子があれたちの仲間なの、見てたから知つてるだろ？ あの子もやれつていうのか？！ 」の悪魔……」

掴みかからうとした彼に、会長が冷笑する。

「言つたはずだ。私は雇い主だとな。ほり、さすがは、やり手武器商、早いもんだ。さあ、仕事だよwww」

上空から大型ヘリが降りる。

派遣たちによつて運び出される最新武器の群。

彼らの数人がオーウェンたちの所に来る。

「『ベース武器開発』の試験スタッフです。よろしくお願ひします。じゃさつそく使える戦士さん行つてもらいますので。……あなたと、そこのあなた……」

派遣さんたちがマニュアル通りに「武器に耐えられる」戦士たちをチョイスしていく。

オーウェンは武器を渡され、ダルトンはもちろんハネられる。

「えーと、守護精靈を出してるかたは、試験資料にならないですぐ消してください」

仕方なく従う戦士たち。
もつあとには引けない……。

そんな状況の変化を、靈獸の上から見つめ続けるミント。胸には気持ちよさそうに眠る、超美少年ルシファーの、か弱い肩が……。

「あんなの怖くない、怖くない。戦士たちだつてもう仲間じゃない！　このルシファーをイジメる奴らなんか！」

ミントの顔が不気味に笑つと同時に、「対暗黒物質線」が照射してきた。

不思議なやさんの冒険25

「やめてー！」

対暗黒物質線 ADRに全身を晒すミント。

まだ幼い腕にしつかりルシファーを抱きながら……。

「あーーーー！」

ミントの体がどんどん暗くなつていぐ。

（やつだ、アタシもうダメだからルシファーをこのまま逃がしてあげよう。ルシファー！ 起きて）

苦しそうにじりえながらミントが彼を起しきりとする。まだルシファーの体には異常がなかつた。

「ねえ……起きて」

どよどよ弱るミント。

「そつか、じうすれば……」

美少年ルシファーの顔を両手に抱いて、なんとか微笑むミント。そのまだ幼い唇が、そつと美少年の唇に重ねられる……初キス……。

そして……田覚めるルシファー。

「あ、さみか……」

顔を赤くする彼に、ミントがなにか言おうとするが、もつ声にならない。

巨大靈獸のほうも、空にぽつかりできた闇になつていて、いないのと同じ状態だった。

「うめん、ぼくのせいだ。ぼくもいつしょに闇になる」

ルシファーがそう言つたとき、ミントは既に闇化していた自分の中に、ルシファーを抱き入れた。

でもその闇は、愛の温かさに満ちて、まるで胎内のよつと

■ ■ ■ ■ ■

『トトロ』

すべてを叩いた戦士たち

ある者は、敵として……ある者は彼女を裏切つた者として……。

あとには2振りの靈劍が……残つた。

「戦士のみなさん、お疲れ様です。」ここで試験を終了します」

無感情にアナウンスする声。

参加した戦士たちは、鉛のような気分でハネられた仲間たちのどこ

ろに戻つてくる。

「……」

「……」

「おーー、さみ」

会長が派遣を捕まえて、戦士たちにわざと聞こえるように囁く。

「あの2本の靈剣、拾つて来い！ あれを武器商に高く売りつけ、金にしてやる。いや、アンティーケ商でもいいwww」

ダルトンの目が、戦士の魂であるそれをぼーっと見ていく。

回収される2振り……。

その上にまだそびえる巨大靈獸の形の暗黒 空間にできた結界の
破れ……。

「ほーう。大人用と子供用の2本か。セットで売つたほうがいいか
どうか……」

商工会長はもう商売のことを考えていた。

ついで

「はっ」

アリスの体が一瞬戦慄する。

「どうされましたか、……アリスさま」

爺のラルフが心配そうに見つめる。

「大丈夫か？ 顔色がヤバいようだけど」

隣から覗き込むように見るベルナール。

アリスは作り笑いをしてみせたが、誤魔化せないようだった。

「た、大変なんだ……あ、ごめん。なに言つてんだろう私……。
…大変なんだ！… …あーっ！」

2人の見てる前で、明らかに異常を起こすアリス。

そして彼らが言葉を失つてるとこに、アリスの体から父の ルシ
ファーに憑かれて失踪したセラフィム卿の こもつた不気味な声
が「出て」くる。

「大変だぞ！ ラルフ！！ 私のあの可愛いミントが……ミントが
！！」

思わず右手から靈剣を出すベルナール。

そして、もうどうあればいいやら、という顔をして、固まる爺。

「おお！　ベルナル！　久しぶりだな。そなたも今聞いただらう？　ミントが、娘が大変なんだ！　……恐れなくてよい。私は、私がだから」

ベルナルの戸惑う表情。そして一応、靈劍は收められる。

「あ、おこたねしお、うるさいやうだよ。」

ラルフがアリスを見てやつと言葉を詰う。

テープルを挟んでソファーに座る3人。 そのシチュエーションには、さつきまでとなんら変わりはない。

「ラルフよ……ちよど良かつたではないか……これで跡目の問題は解決できたのだから」

アリスの口は動かず、体の中から出でてくる声。

「そんな、お戯れを……」「

ラルフは爺でも意外に気が強くて、もうこのありえない状況に慣れ
てきたようだつた。

「で、ミントを、ミントを救つて欲しいのだ」

アリスの「体が言う」言葉に、爺とベルナールは顔を見合わせる。

வாரு

不思議なやんの冒険27（前書き）

このたびは日頃の感謝と致しまして、ハーフタイムショーをありがとうございました。

不思議ちやんの冒険27

「『ううーー！ダメじゃないエトスーー！』りちゃんとやらなこと

ミントが靈剣を振り回してエトスにダメ出しする。

「へえい！」

あいかわらず可憐げのないエトス。

すみどりにからか、女性MCのアナウンスが……。

「さあ、それではいつも読んでくださるかたがたへの感謝の印に、歌つていただきましょーー！『FAIRY BOY』、ヒントーー！」

「まーり」「……」

いつもあたしを困らす

きみはいたずらBOY

でもいつも側にいて

あたしを守るAGENT

Ah... My fairy boy

Keep guarding me fully

A s I s h a l l a l l o w y o u f u l l y

歌つて踊るHトスヒリヒト、略して「Hント」

ヒップホップなダンス……

……彼らのショーガ終わる。

「ひむ」

「なによ、Hトス。……でも頑張ったねアタシたち」

「うそ」

「ふふ」

お読みのみなさま、ハーフタイムショー、楽しんでいただけました
でしょうか……。

不思議なやんの冒険28

2、3時間が過ぎてマンショニに戦士たちが戻つてくれる。

一様に暗く疲れた顔の彼ら……。

部屋に来て、そのまま床に倒れ込んで休みたいという思い……。

だがそんな彼らを待ち受けっていたのは、異常をきたしたアリスと「セラファイム卿の靈魂」の結合体だった……。

部屋に入るなり固まる彼ら。

まずアリスのありえない状態と、それをなんでもないよう受け入れる2人。

さらにアリスの体の中から出ている卿の声すら普通に受け入れてる
2人 ベルナールとラルフ。

ミントのことがあつて、戦士たちのうち卿を知る者は、その日の前の光景に、思わず氣を失いそうになる。

「……」

「諸君、私が怖いかね」

アリスの体から出る「もつた声……。ベルナールたちは何でもない」とのよつと振る舞う。

「ハートは消えました

ダルトンが怒り出した。

「消しました、だろ？」

つづく

帰ってきた戦士の一人、オーウェンがダルトンの口をふさぐ。

耳元にわざやくオーウェン……。

「今は……今はとにかく言い方に気を付けてくれ。分かるよな?」

彼の語氣の圧力……。

アリスが いや正確に言えばセラフィム卿が、ダルトンの言葉に「うなり声」を上げる。……それは人のものではなく、まるでハイエナみたいな……。

「アーアイ、アーアイ」

やつぱは悪靈のせいなのか……。

「やつだよーー ミントはオーウェンたちが『消した』。おれは止められずにただ見てた……。悲しけりやそうやつて鳴けよーー よく似合つてゐよ、その声」

すでに限界だつたダルトンがこわれる。

鳴き声を真似て、卿と一緒に『『』』鳴く。

「やばつ……。やばいよオーウェン、この部屋出よつ

そんな彼らに注がれるベルナルルと爺の凍りついた視線……。

「くそつー、この連中どつかしてるー、行くぞオーウェンーーー！」

「たしかに……ひどい……」

悪靈のせいなのか、魂を取られたようオーウェンがつぶやいた。

「お前ら、話は終わってない」

突然立つて、口を開じたままオーウェンたちに掴みかかってくるアリス。体からは父の声が響く……。

「あー、つ」

へづく

「お前ら、話は終わってない」

父の声とともに、掴みかかってきたアリス。

放心状態のオーウォンがまず捕まる。

その隙に急いで部屋から出て行く仲間 ミントを消すのに従った者たちだった。

アリスの手がオーウォンの胸ぐらを掴む。

「『消した』といつのは本当か…？」 言え！」

アリスの体内から搾り出していく父セラフィム卿の声。怒りに震え、おぞましさに満ちている。

だがアリス自身のほうは、口を固く閉じ、まるで父の状態を悲しむようにただ涙を流している。

オーウォンは答えない。

アリスの右手甲から靈剣が滑り出で……。

シユーッ、パラパラパラ……。

アリスの前に、がつくつと膝を落とすオーウォン。

彼の血しぶきに染まつていいくアリスの美しい顔……頬の血に混ざり

てゆく涙……。

後ろにいた爺とベルナルルが、無言でそれを見守る。

それを見て仲間のうち部屋に残っていたダルトンがすでにこわ
れていた『カラ笑い』する。

「ははは、アリスきれいだ！　ははは」

彼女の声から出る声。

「ダルトン、お前は笑えるのか？　ミントを裏切つて」

根が優しい彼は、急にキレてわめき出した。

「ああそっさ。裏切つた。どうせおれは使えないヤツさ。それに、
それにてめえみたいな悪霊には使えないが、生きてるおれたちには
大事な『カネ』つてものが要るんだ……。カネだよカネ……ミント
を裏切つたらずいぶん貰えたよ、カネ……悪霊は関係ないんだよな
カネなんか……ふざけやがつて！　いい気なもんだな悪霊さまは、
ははは」

そう言ってダルトンの拳がアリスの胸　声の出でいるあたりを何
度も殴る。

「カネ、カネ、カネ！　カネなんだよ世の中は、この悪霊……！」

ダルトンの首に、アリスが吐いた血がかかる。

涙を流し続けるその血塗られた美しい顔。

「カネ、カネ、カネ、……カネ！」

ダルトンがやつと殴る手を止めた。

「……だってさ、おれたちは生きてかなきやいけないんだ、現実を……お前みたいな悪霊と違つて……ラクになりたいなあおれ……」

胸を押されて崩れていたアリスが、ダルトンのその言葉に応えるよう、靈剣を出して下から突き上げる……。

アリスの髪に勢いよく降りかかる血……。

アリスの体が、降りかかる血の雨を浴びながら、かがみ込んだ姿勢のままである。

彼女の意識に広がつてゐる暗黒の安らぎ。

……彼女もいつのまにかよく知つてゐる超美少年、ルシファーが華奢な色白の体を暗闇に浮き立たせる。そして左に彼女の父セラファム卿が立つて、なにかを話している。

「ミントを失つた！！ 私の末っ子を！ カネで買われた戦士たちによつて……それも長女の仲間たちによつて」

嘆き続ける卿を、事件の元凶であるはずのルシファーが慰める。

「きみは分かつたんだ。どれだけ人間が悪なのかを。その元はカネだというのも……。ぼくにはダルトンが死ぬ前言つてたように、カネの能力はない。それは悪霊にはカネが要らないからなんだ。ぼくに必要なのはただ『愛』することだけ……ずーっと昔、まだ神と天使たちがいた頃、愛は彼らに守られてたんだけど、カネに彼らが滅ぼされたあと、ぼくは恐れて愛で身を守ろうとした。……そして今までそれを通して。愛はカネという人間のツールをこえるものだと信じてる。だつて、なにより悪霊のぼくが愛によつて生き延びてるんだからね。カネの時代を」

卿の意外そうな表情……神と天使はとつぐにカネで滅んで、愛を残つた悪霊が相続して受け継いでいる……

「悪靈よ」

「なに？」

卿の食い入るようなまなざし。

「きみは愛そのものなのか？」

卿の質問に寂しく微笑んでうなずくルシファー。

「神が力ネに滅ぼされた今は、愛はぼく、ルシファーそのものや」

卿が悪靈を笑う。そのあまりに皮肉な運命に。

「あれ、笑つて……元気出てきたみたいだね」

（人間が力ネの真実を知ったとき、悪靈よりも悪になる）

つづく

不思議なやさんの冒険32

アリスの脳裏に続く暗黒……。

父セラファイム卿がルシファーの答えに顔を明るくする。

「きみが愛だところのなら、その力でミントのことを戻してくれないか？」

ルシファーの微笑み。

「あなたは自分が何をしているか分かっていない

卿が少しイラつく。

「分かつて！ 分かつたうえで悪霊のきみにお願いしてんだ。どうか、どうかきみの愛で娘のミントのことを……。」

暗闇に浮き立つ卿の青白い顔。アリスの脳裏に浮かんだ言葉「パパ

……」

そして卿に頷いてるルシファー、……なにかを言つてこようだが聞こえてこない。

卿の顔がどんどん苦しみに満ちていく。

そして消えた2人……。

「アリス！」

声で意識が戻る。

気付くと田の前にはベルナールの顔が……。

それに横から割り込む爺の顔。

「そのー、衣類と体は洗ったから……ひどい血の汚れだった

ベルナールが顔を赤くする。

爺のフオローに入る。

「お分かりでしょアリスさま。メイドがおりませんので仕方なく
私どもで洗わせていただきました。……」

すっかり普通に戻ったアリスが、自分を見回す　新しい衣類に、
血をきれいに洗い落とされた体……ボディーシャンプーの匂い。

「……べつにいい。私も戦士だ。そんな状況になることだつて覚悟
してる。……ベルナール、お前も私の体洗ったのか？」

アリスの美しい目が睨む。

「「」、「めん」

アリスの顔が真っ赤になつた。

נְגַדֵּל

不思議なやがれの冒険

「で、私のビームで洗ったの？」

眞面目な顔で、でもなつかしきたことについて表情で尋ねるアリス。

「全部……」

ベルナルの目が泳ぐ。

「せ、全部？」

声が小さくなるアリス。

「それって、…………」も、あれにも、ビームもへ。

頷く彼。

「やう。ビーム全部……」

アリスは自分の養育主任だった爺が洗ったのだとばかり思っていた。

それならまだ自分を納得させることもできた。でも……

「ベルナルさまは爺の体を拭つかつて、ほととぎ自分で洗つてくだけたのです。アリスさまのあられもないお姿を前に、戦士の道に従つて一生懸命劣情に耐えておられ……ほんに爺はベルナルさまに感謝致しておるのです」

アリスの顔が真っ赤だった。

「爺、そんな……、爺？」

急に尋ねるアリス。

「私は……すべてを見られ触れられたベルナールと結婚しなくてはならない？」

爺は二二二の笑顔になった。

「アリスさまがベルナールさまを愛しておられるなら、そうすればよろしいでしょう。他人の体は異性でも、実際その匂いや汚れで嫌悪してしまうのです。それを洗い流してくれただけでベルナールさまの『愛』は十分に確かといえます」

アリスの美しい目が再びベルナールを見る。

「愛してるの？ 私を」

つづく

不思議めがんの冒険34

「愛してるの？ 私を」

アリストに頷くベルナール。

「ああ、もういるん」

……

「やあらん。ぼくはおみを愛してね。//ント」

暗黒の中に、泣き崩れるセラフイム卿と一瞬にやがてやがてこるルシファーの姿……。

「//ント、ぼくはおみのパパと契約したんだ。ぼくの愛でおみを救うとね。だから//ント、ぼくの愛を受けて戻つて」

言に終わったその瞬間、暗黒の一瞬に収縮するルシファー。（……）

温かい暗黒と羊水だ（）

それに呑わせるように、卿が大声で泣き叫ぶ。

「私は、私はなんといつことをしたのだ……。」

……

「おこ、あれ見ろー。」

靈獸の形にでてくる暗黒 結界の破れ の上の、子供形の暗黒
が急に『成長していく』。

すぐに10代後半ぐらいのシルエットになつて止まる。

見上げる人々に映つた次の光景……

少女形の暗黒 結界の破れ が物質の姿を取り戻していく。

そして靈獸形の暗黒を云つて彼らのところに降りてきた。

「みなさん、アタシはミント、セラフィム卿の末娘です」

人々の驚愕して固まつた顔……。

16才くらいに成長した美少女ミントがたたずんでる。

「だれか、妊娠したこのアタシをお世話してください!」

無言の觀衆。(……)

「お願いです!」

そろく回りのまづから、珍しく彼女と同じ年くらいの精靈がやつてきた。

「ノーテー!」

「……ヒトス? ヒトスね!」

その精霊は、外見は大きかつたが、まあれもなくミントの守護精靈エトスだった。

「ミントさん。あなたを守るためにこの姿で戻りました」

彼女のお腹を優しく撫でて、顔を赤くするエトス。

ミントの母性的な笑み。

「愛してる。あなたを」

つづく

灰白色の施設の庭にびっしり敷き詰められたタイル……その小片の一つ一つが戦士の墓石の代わりをしていて……最近死んだことを記すアール、クアドラン、オーウェン、ダルトンの名がー。

「う、うーつ」

あちこちで聞こえてくる嗚咽、すすり泣き。

タイルの上に立つて涙を流す人たち、そして元守護精霊……

「あたしは、ダルトンさんを殺したアリスを許さない。……許さない。たとえそれが『守護精霊協約』に違反してもーー！」

一人の女の子の精霊、リオ……。憎しみで眉間にシワが刻まれている。

「許さない、アリス。そして彼女を守る者たちすべて……」

リオの指が慕うようにダルトンの碑銘をなぞる。

（あたし、ダルトンさんを愛してた。ほんとは人間に生まれて、女として彼を愛し子供が欲しかった）

考えながらリオの中で広がる罪悪感……守護精霊の禁則事項を破っていることの恐怖。

「いいわ。決めた。やる」

□○△▽

不思議なやさんの冒険36（前書き）

「許せない、アリス。そして彼女を守る者たちすべて……ふふ」

不思議なやんの冒険⑥

2ヶ月が過ぎ……

「おめでとう、お姉ちゃん！」

ミントの笑顔。

その向こうにたくさんの友だちの笑顔が。

アリスを取り囲む祝福。

そう、今日は女がここがれるあの日、拳銃事件だった。

「マジキレイ！ お姉ちゃん良かったね」

あの事件でアリスと同じ年になつたミントが同じ田線で微笑む。

（この子はあれで良かつたのかな……私なんかよりずっとキレイになつたの）

友だちの中からミントを見守つてる守護精霊エトスが見える。ミントはまだ妊娠2ヶ月の不安定な時期。

「アリス、こっちも向いて！」

「アリス！ キレイ！」

「こっちも見て！」

幸せの絶頂を感じるアリス。まるでこの世のすべてが自分を祝福してくれてるよ、アリス。

「アリスちゃん！」

彼女の守護精霊のメンバー全員がカワイイ姿で走ってくる。

きれいに「コーディネートされた衣装に身を包んで。

「アリスさん、もつすぐお式が始まります。行きましょうー。」

マナとレンが姉弟みたいに囁く。

「分かった。……………」

胸に手を当てて田を閉じるアリス……囁みしめる幸せ……

（歌が聞こえてる。この式場ではなくもつと遠くのほうで……小さい女の子のきれいな声。つれしさと悲しが混ざり合つてな……。

花の種を植えたの……芽が出て伸びて……きれいな花が咲いたの……そしたら女の子がやってきて……花を摘んでいった……あたしの枯れて……種も残らなかつた……）

「わあ行きましょ、お姉ちゃん」

ふ
ふ
つ

ひ
び
く

不思議なやんの冒険37（前書き）

「ふふ、幸せ？　アリス」

不思議なやさんの冒険③

アリスの前の扉が開く。

溢れ出す光。

と同時に流れ出す音楽。

まっすぐに延びる長い通路を、ゆっくり歩き出す。

隣には、失踪したままの父の代わりに妹のミントが腕を組んで歩く。

大好きないい歌が流れ、体中に視線を感じながら、ベルナールの待つ祭壇に進む。

ゆっくり流れる時間……」のまま止まってしまうに……。
……。

「ふふっ」

誰？

さりげなくミントを見る。でも彼女ではない。

「ふふふっ」

また女の子の声……

後ろに仕える自分の守護精霊の誰かだろうか……でも声が彼女たち

と違ひ。

「ふふふ」

気になる、まさかコレマリッジブルーなのだらうか……

「ふふ。 幸せ?」

またする声。

音楽はちやんと聞こえている。

「アリスお姉ちゃん、 大丈夫?」

ミヒトがそつとひねをやく。

頷くアリス。

もひすぐそこには、ベルナルールがいる。

音楽が終わりかけ、アリスの足が最後の一歩を踏み出す……

「ふふ、 ふふふふ。 幸せなんだアリスは」

声のするほうに思わず振り向く。

すぐ左前の最前席から小さな女の子が振りかえる。……あ。

「知ってるでしょ、アタシを」

その眉間に刻まれてる、子供にはあつえないぐらいの深い憎しみのあと。

ふふつ

へびく

不思議な姉さんの冒険38

アリスの様子に気づいたミント。組んでる腕を自分のほうへ引かれてる……。

「分かったお姉ちゃん。でも今はちよつと……」

承知のうえで、アリスにそれをこて普通を装いつつ。

あともう少し、その女の子の精霊リオが攻撃性を示していたり……。きっと反射的にアリスの右手が靈剣を出してたに違いない。

「今は落ち着くの。いい？ お姉ちゃん」

ミントのまづが姉みたいに、しつかりアリスのことをベルナールに渡す。

誓いの式が始まる。

その前で、アリスの守護精霊たちがリオの座つてるとこをやりげなく取り囲んだ。

「「めんなさい、」「こせせていただきます」

次々に席を譲る周囲の招待客。アリスの守護精霊と知つての気づかいだつた。

彼女らに囲まれたりオ……「ふふつ」

「協約違反だ、リオ。第25条によつてお前を直ちに無力化する」

子供らしい声で、周囲に氣をつかつて小さく宣告するアリスの守護精霊たち。

リオの目が、なぜかこの場になつてもまだ薄笑いしてゐる。

「開始」

アリスの守護精霊たちが無抵抗な精霊リオの靈力を抜き取つていく。

静かに進められる作業。

壇上では、お互いの誓いが終わつて指輪贈呈とキスに入るところだつた。

「いいでしょ……リオは消えてつてゐるわ」

アリスの守護精霊たちが『かわいいエージェント』になつて、リオのことを消そうとしてゐる。

「完了」

それは不気味な響きだった……。

「」

つづく

祭壇の前でキスを交わした2人……その瞬間……

アリスの胸に言いようのない「飽き」が広がつてくる。

とにかくムリ、もう彼のすべてが……。まるで「魔法かなんかのせい」で、急に愛が冷めたように……。

アリスの中で、幸せの絶頂に感じられたこの結婚式が、今は親族・友人への義理感で幸せを演じなければならぬ場になつていて。心は鉛のよろに重い。

「早く終わらせましょう」

アリスがキスを止めてベルナールに言つ。その飽き飽きした顔。

「な、なに言つてるんだ急に」

ベルナールは意味分からぬといふ反応だったが、アリスの様子がマジ冷たいので、不快になつてくる。

「なあ、アリス！ なんだよそれ！ おい！」

まったく予想外のアクシデントだった。

「うわ。一緒に空氣吸つてると思つだけで、もうムリー。」

それはアリスの、今の本音だった。

ざわめく参列者や招待客。

「ふざけるなよ… 酷さんの気持ち考えないのか！」

ベルナールは、こんなにアリスがジコチューだとは思わなかつた。

「だからひいこんだよ…」

アリスがそう言い残して、壇上からひきと降りてつてしまつ。

（こんなのが結婚？ ありえない！）

来た道を一人帰つていくアリス……。

彼女の守護精霊たちが、ようやく気づく……「リオの仕業だ！ 復讐として、リオは消える前にもつ、『結婚生活の倦怠感』をアリスに植え付けてたんだ…！」

……ふふ、結婚が幸せ？ アリス。愛は冷えるのよ……

つづく

不思議な冒険40

……テープルに乗せられた手紙……それはまだ300枚……すべてがアリスあての非難文。

ベルナールはアリスの急変に悩みながら、いまだに彼女を理解しようとしていた。だつてまだ数週間しかたつてない新婚なのだから……。

ベルナールが目を通す。

手紙のほとんどが祝儀を返還するよう求める文で締めくくられている。

(人としてありえないとか、時間を返せとか言つて最後は結局カネなのかよ、みんな……)

ベルナールも情けなくなつてくる。『カネ』の2文字の前に、彼の愛もまた冷えてきていた。

(アリスもこんな気持ちなんだろうな)

手紙の1枚が彼の手から落ちる。

なにげなく拾い上げるベルナール。

(……これは復讐です。アリスさんこよひへお伝えください。故ダルトン守護精霊リオ……)

ベルナールの手がぶるぶる震え出す。膝に力が入らない……。

「う、うわーっ！ 精霊の恨みが原因なのか……」

ベルナールの脳裏をよぎるリオの子供らしい顔と姿……ほんとによく知ってるダルトンの守護精霊だった。あの子が……。

（どーすりやいいんだ、元守護精霊を相手に……勝ち田はない。自分でじや……）

戦士アールの最期を思い出す。

（つづか、リオはアリスの守護精霊たちが無力化したって聞いたのに、……なんだこの手紙は……）

ベルナールに悪寒が走った。

つづく

不思議な姫さんの冒険4-1

結婚式の日以来、ベルナールとは一度も夜をともにせずに別居を続けるアリス。

せつかく彼がセラフィム卿の家に養子に来ててくれたのに、アリスはなんの愛も感じなくなつて……今はミントと一緒に爺の実家に別居していた。

「お姉ちゃん、やっぱおかしいと思つたら……精霊のせいやうじいちゃん。アタシ、ヒトスから聞いたよ、全部……」

じつはその原因になつた戦士ダルトンの死が、ミントと深いつながりがあつたのをミント自身が知らなかつたのだつた。

複雑な表情のミント。

アリスは、精霊リオの復讐といつもには、あまり感情を抱いてなかつた。

愛が冷めたのは他人のせいにできないといつ思つ……。

「お姉ちゃん、アタシはずつとお姉ちゃんの味方だから

庭園に臨むバルコニーでお茶を飲む2人……。すべてが平和に見えた。

不思議なやさんの冒険42（前書き）

今回で終わりです。

それでね、やつべつ…

不思議な夢の冒険42

…… IJのRPGは妻のアリスが小学生だった時のプレイしたやつだ……

……プレイしたゲームは彼女のような認知症患者にもリハビリになるとがで、（そもそもやつたいんだがw）ここで見守つてる……

ヘルパーのジャンさんがゲーム機をアリスに渡すとそれはもうありますいぐらいに顔がしつかりして……その指の動きの早いこと……。

「アリス、夢中だねw」

『……愛が冷めたのは他人のせいにできない……』

ディスプレイに出た言葉。なにかこのゲームの//ラクルワード//で

ステージがクリアされたようだ。

「やつた！ やつた！」

子供のように大喜びのお前w

「ベルナルルさん、アリスさん楽しそうでよかったですね」

ヘルパーのジャンさん。ほんといい方だ。

「あ、ラストクリアしましたよー！ アリスさん」

流れる音楽……ぼくにも懐かしい曲……

G
A
M
E

O
V
E
R

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3377/>

不思議の星のアリス

2010年10月17日02時48分発行